『広島平和科学』21 (1998)　pp. 227-238　ISSN0386-3565
Hiroshima Peace Science 21 (1998)

ヒロシマとナガサキの意義

ハヨ・クロンバック
ロンドン大学自然社会哲学センター
一條都子訳

The Meaning of Hiroshima and Nagasaki

Hayo KROMBACH
Centre for the Philosphy of the Natural and Social Sciences
London School of Economics and Political Science
translated by Atsuko ICHIJO

この時代は，たとえ永久に続こうとも，最後の時代である。なぜなら，人類の自己破壊の可能性をなくす方法は，自己破壊しかないからである。最後の時代は，時間の終わりであり，従って最後の時代が終わることのないよう尽力しなければならない。

1995年夏，数知れぬ記念式典をもって，世界はヒロシマとナガサキの原爆犠牲者を悼んだ。こういった記念行事は，被害者・加害者双方の視点から戦争の現実を直視し，共通の歴史理解を育て上げることを要求する。今や，この行為に人類の将来がかかっているのである。

我々がかつて慣れ親しんでいた超越的で神聖な（＝宗教的）判断基準が，現代の事実主義の判断基準に取って代わられてから長い時間が過ぎている。この現代的な判断基準に従い，我々は，なんらの方向性も，意味を付与する道徳的原則もないまま，個人として，また種として，自分達のことだけを考えてきた。しかし，この世俗的な世界で，一見啓けてはいるものの，魅力を失った（disenchanted）歴史的現実から，どうやって我々の生命が消滅するか，それとも人類が一つになれるかが判断できるだろうか。そして，原爆の製造によって，全能であると同時に不能になってしまった以上，一体，どういった判断・正当化の基準に従えば良いのであろうか。だからこそ，再び人間性の意義についての根本的な問いを発することが今必要なのだ。

世界唯一の被爆国であるということ，太陽の宇宙的力をもって攻撃されるということは何を意味しているのだろうか。1945年８月に原爆を経験し，生き残った人々は，知っている。やはり生き残った我々は，すべてを焼き尽くす爆風を想像し，内面化するという，より難しい課題に直面している。時と空間を隔てて，そういった精神的な跳躍を実行するのは難しい。また，罪悪感を意識し，今世紀に人間がしばしば犯してきた最高悪（summum malum）に対する警戒を続けるのも難しい。ある意味では，今生きている我々は50年前に起った出来事に深く影響されている。それは，ヒロシマとナガサキが，人類全体にとって非常に大きな意味を持っているか

らである。我々は，皆，原爆を生き残った。我々は，皆，ヒバクシャである。我々は，原爆の現在における意義，そして将来に対する意義を充分に考えなければならず，その点において原爆は人類全体に影響を与えている。

身体的そして精神的な苦しみの経験は，通常の社会・歴史理解を超えている。しかし，我々は，ヒバクシャの苦しみを，核戦争という概念と，この核戦争が人類につきつける道徳的・政治的ジレンマの関係についての念入りな考察というと形で理解しなければならない。この内省的な努力を惜しめば，我々の戦争観は，一貫性に欠け，また説得力のないものとなり，核戦争を防げないかもしれないからだ。

本論では，核時代における倫理的思考の責任という問題を批判的に取り上げたい。本論は，拙著『核時代のヘーゲル哲学』（法政大学出版局1998年）で論じた全体論的思考を，大まかな形ではあるが，補完するものとなる。前掲書では，社会歴史的弁証法と現象学を解説すること，および，人間生命のグローバルな構成の理解に必要な概念形成のプロセスを叙述することを目的とした。人間の行為・行動すべてに内在する原則は，弁証法に見出される。一方，現象学は，主観的哲学を用いて，この原則を意識，世界，歴史の枠組みのなかに組み込む。そして，弁証法と現象学では，主観－客観，「ある」こと－「なる」こと（being-becoming），意識－自意識，理解－理性（Verstand-Vernunft），といった概念のペアを用いて，一見関係のないように見える事実に文脈上の意味を与えるのである。人間は，社会・歴史的関係を内省的に生きて初めて，人間存在の根源への脅威に対応する必要性に目覚め，その保護の責任を引き受ける。前掲書は，核兵器によるホロコーストという概念の哲学的意味についての解釈学的探求である。この目的を達成するため，多数の哲学者の思想と，どのように個人が，自分はその一部を構成するに過ぎない全体を把握できるのか，という問いをシステマティックに解釈した。

核時代についての理解は，1945年以降，どう変わってきたであろうか。ヒロシマとナガサキは，冷戦の当初から，核兵器競争と脅威のバランスに形をかえ，第二次大戦後の出来事を左右してきた。日本への原爆投下により，核兵器は使用可能であ

ることが証明され，同時に全人類の将来を脅かすものであることが分かった。前例のない破局を防ぐためには，技術の発展と同時に倫理的意識の発展を図らなければならない。また，他者との関連における人間の尊厳の哲学的条件を熟慮しなければならない。全人類が守るべき道徳的指針に従わない限り，悲劇が訪れるからである。

原爆は，歴史の産物であるが，同時に歴史を終わらせる力も持っている。従って，原爆は，人間の意志，行動，希望すべての敵である。考えられないことが，実は考えられることに気づいた以上，人間は，この事実を受け入れて行動するより他にない。このため，ヒロシマとナガサキは，非常に深い歴史的意義を持っているのである。ヒロシマとナガサキは，我々の世界がフェニックスが甦ることのない，一面灰で覆われた世界になる可能性が常にあることを指し示している。この進化上の断絶を考えれば，我々は謙虚にならざるを得ない。一度絶滅した種は，二度と進化しないのである。死は生命の終わりであるが，絶滅は誕生の終わりである。種の一部でしかない我々は，どうしたら，冷静に種全体としての生命の消滅を評価できるだろうか。

人類絶滅の危機の源は，特定の社会的・政治的状況や国家間の勢力関係にあるのではない。こういった状況は，歴史的に見て偶然的である。現在のところ，核兵器による攻撃はおろか，核兵器による脅迫もありえないが，将来については予測が立たない。紛争が危機にエスカレートし，そして戦争勃発と核兵器の使用につながるかもしれない。勢力関係のダイナミクスは，変化し続け，地理的焦点も変わり続けるが，それ自体は人類の生存を脅かすものではない。むしろ危険なのは，人類が何千年にもわたる科学的・技術的進歩を経て，物理的宇宙に関する一定の知識を得て，それを使って核兵器を製造できるようになったことである。その上，この知識は，今では時間・空間を超えて人類全員によって共有されている。しかし，人類が，核兵器と永久に共存できるほどに，心理的・哲学的に成熟しているかどうかは，不明である。

従って，核時代は過去の時代とは全く違う性質を持っている。平和，自由，勝利といった概念は，世界的視野においては，違う意味を持つようになった。それに加えて，戦略論の大黒柱である抑止も，核兵器を最終手段として使用する用意があることを前提としている。しかし，抑止が必ず有効であるという保証も，抑止が崩れた際，核兵器が使われないという保証もどこにもない。こういった不確実性がある以上，人類は，戦争の可能性が不可避であることをまず認識し，そして核兵器の倫理的論理は何なのか，問わなければならない。

人類は，乗り越え様のない二律背反に直面している。一方には，核兵器を廃絶すべきだとの議論がある。他方では，そういった目標は決して達成されることはない，との洞察もある。たとえ，すべての核兵器システムを廃絶することが政治的・技術的に可能だとしても，その製造方法と配備方法の知識は常に我々の良心の重荷となるだろう。我々の内省は，現状と理想の二律背反に囚われてしまう。二律背反は，選択を可能にする。しかし，核兵器の場合には，選択は不可能である。なぜなら，一方を選択すれば他方と対立し，妥協不可能な結果を招くからである。

原爆が製造されたため，人間の道徳意識の強さと人間生命の倫理的視野の基礎と条件が疑問視されるようになった。核時代における倫理的視野は，ローカルからグローバルまでカバーしなければならない。このため，我々の思想のパラメターをもはや政治的二極化によって制限してはならない。我々は，イデオロギーの種類に関わらず，国際的な社会・歴史現象がどうしようもなく相互関連していることを認め，受け入れなければならない。

従って，個々の国家と人類という部分－全体関係の原則によると，人間の行為と目的は，不偏不党であり，また，行為の動機に対する判断が，単なる個人の利益の正しさを超えて，地球的な関心の真実と有効性にまで高められた場合にのみ，正統であるとみなされることになる。我々は，部分を条件付け，必要とするのは全体であり，その逆ではないとの明確な認識を持つべきである。

これまでの哲学思想は，世界の諸文化に複数の倫理システムが共存するのを許してきたが，これは，かつては，ある倫理システムが違反されても人類全体に影響を与えることがなかったためである。しかし，多元主義（pluralism）は，数々の文化表現の相互理解を可能にするような概念上の一体性がなければ，有効ではない。核兵器は地球規模の兵器であり，従って，人類は統合的な倫理の必要性に敏感にならざるを得ない。人類全滅という可能性を前にして，単なる多元主義で満足することはできない。それでは，普遍的な倫理の起源と絶対的な条件は何であろうか。

まず，国際関係における功利主義の原則と，抑止という大義に基づく個々の国家の利益の押し付けは，概念上，偏っており，従って，人類の窮地に見合う倫理的配慮という基準を満たさない。全体論的な政治的理性への意志は，国際関係を世界的影響という観点から熟慮する義務を認識しなければならない。個々の国家の利益や自衛の権利といった実際的な問題は，こういった熟慮無しでは乗り越えられない。自衛の権利は，自衛戦争が人類に対する核戦争に発展することを正当化しない。また，消滅の危険も正当化しない。換言すれば，正しい戦争・誤った戦争（just and unjust wars）の原則は，核時代においては，何が重要なのかという疑問に応用した時の，その道徳的および法的有効性の観点から検討されなければならない。哲学的な内省によれば，ある部分の権利は，全体に敵対する権利ではないことが明らかである。論理的に言っても，全体がなければ部分もありえない。従って，すべての世界内在的な決定は，唯一，内実のある批判のできる人類の倫理的立場に立ってなされるべきである。

同時に，核反応についての科学的な知識と核兵器が開発可能であるという歴史的事実は，変えようがないことを認識しなければならない。従って，核のない世界に住めると考えるのは，厳密に言って，無意味である。人類には，自らの進化の源である自然の法則を理解する知的な権利がある。事実，核兵器を禁止することは，自然と歴史に敵対することを意味する。人間の合理性は，この自然と歴史の中で育まれてきたからだ。しかし，人類はこの合理性を，規制された思いやりのある方法で使うことも，ドグマティックで破壊的な方法で使うこともできる。この合理性によ

り，人類は注意深くそして世界的な視野に立った政治判断を下すこともできれば，技術上の能力があるというだけで，その行為にまつわる危険を顧みず，その行為を実行するべきだ，と思い込むこともできる。

抑止関係が一度でも崩壊してしまえば，短期的には肯定的な結果があったとしても，それを遥かに上回る危険をもたらす。しかし，この「肯定的な結果」を証明することは不可能である。なぜなら，抑止の究極的なメカニズムはまだ分かっていないからである。抑止論では，抑止するものとその敵との間に緊密な関係があると仮定されている。そこには，応答という要素があり，従って，精神的なプロセスに左右される。従って，より複雑で，核兵器拡散の危険に晒されている世界で，抑止に必要な絶対条件が何なのかを客観的に判断するための，超越的な調停者は存在しないのである。抑止関係は状況依存的であり，誤解の可能性とその誤解ゆえに対話が始められない危険に晒されている。加えて，抑止の「恩恵」は，兵器使用という，道徳的には非難されるべき脅迫に基づいており，従って，核の平和という考え方は問題であり，有害である。抑止が破られる可能性は，将来，ますます大きくなる。この理由からも，大量殺戮兵器を廃絶しなければならない。しかし，原則的には核兵器の開発が可能である以上，こういった任務が完全に遂行されることは決してない。我々の倫理的感性が，この耐えられないアポリア，この悲劇的なジレンマを乗り越えられるようになる日は来るのだろうか。

通常，行為の規準は，行為の根底にあり，また行為の方向を指し示す動機との関係によってのみ適切に判断できる。そして，他者を自己に取り込むためには，中立性の法則によって動機を決定しなければならない。ここにこそ－そしてここにのみ－行為主体間の互恵的あるいは相互関連的な関係の基礎がある。行為者が，社会的・歴史的に互いに依存しあっていることを意識するという意味において弁証法的に形成された関係がなければ，分裂と断片化しかないからである。しかし，特に核時代においては，ある行為主体の行為の意義や結果を，相互関係においてばかりではなく，人類全体に関しても配慮した上で，動機を形成すべきである。この部分－全体関係に見出される，自然でかつ社会歴史的に媒介された有機的構造は，包括的

な思考のア・プリオリの規則である。つまり，個々の国家行為主体は，その行為の動機を外面的道徳性と自己利益ではなく，内面的な世界関係の倫理的意識に沿って形成すべきである。

この核時代における定言命法に従うには，思考のパラダイムを中心から文脈へ変えなければならない。また，これは逆行不可能な，ゲシュタルト転換である。そして，この文脈は，従来は国家中心的な政策関心で規定されていたが，これからは個々の国家の利益の領域を超えた関心で規定されなければならない。この文脈が行為主体の意識にどう現れるかは，現象学の主題である。相互拘束的な倫理規範は，それが絶対的に文脈によって条件付けられていると理性的に意識されていなければ不可能である。この意味において，現在核兵器を保有し，将来核兵器を保有することになる国家の政治的決定に，地球的な視野が織り込まれることが必要である。全人類を視野に収めた政治目標は，道徳的に正しいばかりでなく，倫理的に必要である。ある思考がその限界に達すると，弁証法的にそれ自身を超え，より広い視野ー実のところ，この思考はここに根差しているーで考えられるようになる。この思考が，隔離された行為であることは決してない。それは常に社会的に媒介され，つまり，弁証法的である。例えば，国家の自衛権にも限度があるのである。結局のところ，国家の複数性は歴史の産物である。そして，国家のコミュニティは，この歴史の継続に対し目的論的な責任を負っているのである。我々は，歴史からの呼びかけに目的意識をもって答えなければならない。

二十世紀の歴史は悲劇的であり，世界を「…然るべきである」との考え方に沿って変えられるという認識が，非実際的でかつ非常に危険なものになったことを様々な点で教えてくれる。しかし，核兵器が存在する以上，人類の未来のために続けなければならないプロジェクトがある。我々は，人間が傷つけられることのないような国際関係を作り出さなければならない。完全な生活を約束するわけでもなく，また，悪や欠乏，紛争のない将来を目指しているわけでもないので，これはユートピアではない。核兵器が存在する以上，ナイーブで，どちらかと言えば感情に偏っている倫理観から，人間は理性を人間の敵にできる能力を持ったものであるというリ

アリスティックでより啓けた考え方に意識を切り替えるべきである。可能なこと，持続できること，そして望ましいことのバランスを取らなければならない。

核兵器は，地球的な性質の力ではなく，宇宙的な性質の力を使用する。そのため，理論上は可能になったことが実際に起きることは決してないと考えるべきである。人類は，今や，自己破壊メカニズムにも似た状況で生きている。人間が確立したのでもなく，また，人間によってコントロールできない法則に沿って働くメカニズムである。人類の自己破壊を可能にするこの宇宙的なプロセスは，同時に地球上の生命を可能にするものなのである。核戦争は，人間の理性が生命の基盤を破壊する手段なのである。

ヒロシマとナガサキに落とされた原爆が，人類史上，実際に投下された唯一の原爆となるとは信じがたい。つまり，人類の自己破壊の可能性が完全になくなることはないということになる。従って，様々な制度を用いて核兵器を細心の注意をもって統制し，それを何世代にもわたって－永久に－続けるより他に方法はない。核兵器を配備し，使用するという動機は，常に存在すると考えるべきである。核兵器の破壊的力が，いつの日か，理性的なコントロールを逃れてしまうことは決してないとは，誰も保証できない。万が一，そういった事態が起ったとしたら，それは，技術革新の自動的なフィードバック・システムとコンピュータ制御された兵器システムにより，人間の関与が無効になり，人間の理性がものを考えない科学に取って変わられた結果となろう。

核兵器の自然法と人類の歴史の弁証法的あるいは社会的発展は，時代や空間が異なっていても，普遍のパターンをたどる。しかし，人類が歴史的に分化し，知的にも発展しているとしても，自然はそういった合理化には無関心である。人類の歴史は，結局は自然法に包合されている。自然法は，地球上の生命を最終的に決定するものである。従って，自然法は，核戦争が起れば，自然は進化の過程からその最も高度な産物を引き上げる，とはっきりと教えている。これは可能性に過ぎず，人間にはその必要性を計測する手段がない，と議論するのは，皮肉屋と怠惰で浅慮な思

想家の特権である。ここには，知的な慎重さが欠けている。また，政治的知恵にも，大量殺戮兵器の製造に付きまとうリスクに対する注意にも欠けている。

地球上の生命は，それを取り巻く宇宙的な状況と比べれば，小さい。しかし，宇宙における意識ある生命体が，我々の地球的観点からはマージナルであり，抹消的であるとしても，その移ろいやすく偶然的な存在の内在的な意義を理解しなければならない。人間行動は，この偶然性を直視することで可能になる。この内在的な関係は，地球上の生命が消えるとしても，一日限りの命ではない，ということを意味している。地球上の生命の本質は，この偶然性－だからこそ人間の生命は本物なのである－に見出される。万物がすでに完全な形に創造されているのであれば，水平方向－他の個人との関係－にも垂直方向－社会的そして歴史的に育まれた人類の遺伝という点－にも意義ある行為を行う必要はなくなる。換言すれば，偶然性こそが本質的な生命存在の必要前提条件なのである。宇宙の法則は，人類と意識ある生命体の誕生の条件である。人類の生命は宇宙的基準からして限りがあるだけではなく，人類は自分達の終焉を招くことができるのである。

しかし，人類の生命に限りがあると知っていれば，そういったニヒリスティックな行為を取らざるを得ないのだろうか。人類はいずれ消えるからといって，人類を滅ぼさなければならないのだろうか。遠い将来自然の力によって，もしくはもっと近い将来に人為的な行為によって，消え去る生命をどうやって扱えばいいのだろうか。傷ついた意識を癒し，尊厳ある慎重な平和の条件を作り出すのは，偏狭な利害関心から抜け出せるような，そして地球上の生命に対し全体論的な視野を持つことを動機づけるような教育しかない。人類の最高善（summum bonum）としての思想の真実の追究が支持され，保護されるとすれば，この教育は，哲学的な性格のものに違いない。更に，そういった教育を通して，新しい世代は，地球上の生命の破壊を意図したり，求めたりせずに，自然・人為的環境で生きる方法を学ぶだろう。

新しい道徳・倫理意識の形成の第一歩は，部分から全体，個人から人類への態度の切り替えである。筆者が前掲書で試みたように，我々は社会・歴史的現象の弁証

法的・相互関連的構造を理解しなければならない。また，こういった関係を，その認識が人類の将来の指針となるような政策に統合されるような方法で理解しようとする意欲も必要である。グローバルな視野に立った倫理意識がなければ，核時代においては個人も国家主体も道徳的行為をとれない。こういった関係を把握し，ヒロシマとナガサキの人間行為についての恒久的な意義を説明するのは，哲学の永久の課題である。

参考文献

Garrison, Jim *The Darkness of God: Theology after Hiroshima*, (London, 1982)

Henrich, Dieter, *Ethik zum Nuklearen Frieden*, (Frankfurt, 1990)

Jaspers, Karl *The Future of Mankind*, (Chicago, 1973)

Jonas, Hans *Das Prinzip Verantwortung*, (Frankfurt, 1979)

Jonas, Hans *Philosophie: Rückschau und Vorschau am Ende des Jahrhunderts*, (Frankfurt, 1993)

Krombach, Hayo *Hegelian Reflections on the Idea of Nuclear War: Dialectical Thinking and the Dialectic of Mankind*, (London/New York, 1991) ；植木哲也訳『核時代のヘーゲル哲学』法政大学出版局，1998年

Krombach, Hayo 'International Relations as an Academic Discipline', *Millennium: Journal of International Studies*, (1992, vol. 21, No. 2, pp. 243-58)

Lifton, Robert J. *Death in Life*, (London, 1968)

Lütkehaus, Ludger *Philosophieren nach Hiroshima: Über Günther Anders* (Frankfurt, 1992)

Minear, Richard H. (ed. and transl.) *Hiroshima: Three Witnesses*, (New Jersey, 1990)

本稿は，Krombach, Hayo *The Meaning of Hiroshima and Nagasaki*, (IFS Info 2/1997) (Oslo, 1997) の全訳である。